ミシェル・トゥルニエ
榊原晃三訳

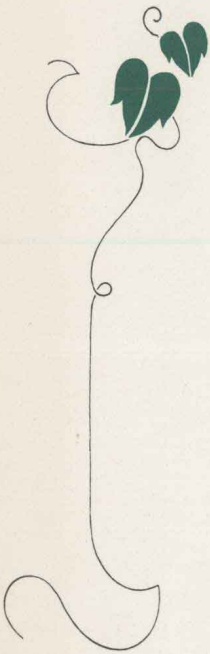
オリエントの星の物語

Gaspard, Melchior & Balthazar

白水社
世界の文学

オリエントの星の物語

ミシェル・トゥルニエ
榊原晃三訳



訳者略歴
一九三〇年生
一九五五年早大大学院修士課程修了
仏文学専攻
共立女子短大講師
主要著書
「ジャンヌ・ダルク」
主要訳書
トゥルニエ「フライデー・または太平洋の冥界」
シャルル＝ルー「シャネル・ザ・ファッション」
マルソー「クリージー」
グゴー「大脱出」他

白水社　世界の文学
オリエントの星の物語

定価一七〇〇円

一九八三年一一月三〇日印刷
一九八三年一二月一〇日発行

訳　者　榊原晃三
発行者　高橋孝
印刷者　東洋経済印刷
発行所　株式会社　白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
営業部〇三(二九一)七八一一
編集部〇三(二九一)七八二一
電話
振替　東京　九一三三二八
郵便番号一〇一

加瀬製本

ISBN 4-560-04444-9

メロエ国の王　ガスパール

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

目次

メロエ国の王　ガスパール……五
ニップル国の王　バルタザール……四九
パルミラ国の王子　メルキオール……八五
バルブドールあるいは世継ぎの物語……一一三
ヘロデ大王……一三七
驢馬と牛……一六三
マンガロール国の王子　タオール……一八三
付記……二八七
解説……二九三

わたしは黒人である。しかし王である。たぶん、いつの日にか、わたしはあのシュラムの女（旧約聖書、〈雅歌〉第六章でたたえられている女。一説に〈再び平和を見出す〉の意）をたたえた歌の一節『われは黒けれど美わし』（ニグラ・スム・セド・ファルモサ）をわが王宮の門扉の上に書きしるさせるだろう。実際、男にとって、王冠ほど美しいものがまたとあろうか？　このことは、わたしにとっては、思いもつかなかったほど確乎たる信念であった。金髪というものがわたしの生涯に侵入して来た日まで……

すべては、冬の最後の月に、わが主任占星術師バルカ・マイのかなり不分明な告知によって始まった。バルカ・マイは誠実かつ細心な男で、その学問知識は、彼自身信用しなければしないほど、ますますわたしに信頼を抱かせている。

わたしは王宮の露台に出て、暗い空を前にして思いに耽っていた。満天に星がきらめき、春を告げる生暖かい微風が渡っていた。砂嵐が長い一週間猛威をふるったあとで、今は一時的な衰えを見せていた。わたしは砂漠を吸いこむような思いで胸をふくらませた。

かすかな物音で、だれか人間がわたしの背後にいることがわかった。だれであるかは、その遠慮がちな近づき方でわかっていた。そんな近づき方をするのはバルカ・マイ以外の人間ではあり得なかった。

「汝（なんじ）の上に平安を、バルカ。何を知らせに来たのか？」とわたしはたずねた。（「汝の上に平安を」はイスラーム教徒の挨拶の常套語）

「陛下、わたくしめには、ほとんど何もわかっておりませぬ」と彼が例によって慎重に答えた。「しかし、ほんの些細なことも、陛下には隠してはおけませぬ。実は、ナイルの源からやって来た旅人が、彗星の出現を予告しておりまする」

「彗星？　説明してくれ、彗星とは何だ？　彗星の出現が何を意味するのか？」

「最初のご質問のほうがずっとお答えしやすうございます。彗星という言葉はギリシャ語の〈ἀστήρ〉〈κόμη〉つまり〈髪の毛のある星〉に由来しております。予知できない仕方で空に現われたり消えたりする放浪の星でございます。ふさふさした髪の毛の塊りを引きずる頭が主要部分となっております」

「要するに、空中をとぶ首というわけだな。話を続けよ」

「ああ、陛下、彗星の出現が予告する不幸はほとんど常に慰めになる約束をはらんでいるものの、めったに縁起のよいものではありませぬ。たとえば、一国の王の死に先立って彗星が出現した場合、それがすでに王の若き後継者の生誕を祝っていないかどうか、どうして知ることができましょう？　それに、痩せた雌牛の誕生は決まって、それから数年は肥った雌牛の時代が続くことを予告するものではありませぬか？」

わたしはバルカ・マイに、それ以上まわりくどくは言わず、まっすぐ本題に入るようたのんだ。

「要するに、その旅人が予告している彗星は、どういうわけで注目すべきだと言うのか？」

「第一に、その彗星は南からやって来て北に向かっておりますが、何度も停止しますし、気紛れに変化もしますし、何度も鉤の手に曲がったりもします。ですから、わが国を通過するかどうかはまるで確かではありません。国民は大いに安堵いたすことでございましょう！」

「往々にして、戦い、王冠、血のしたたる拳その他いろいろなことが異形の遊星のせいにされるでは

ないか！」

「いえ、旅人の予告する彗星はきわめて正常な形をしておりまする。先に申し上げましたとおり、波打つ髪を持つ頭でございます。ところが、この髪について、実に奇妙なことが観察されたと、わたくしのところに報告が入ったのでございます」

「何と？」

「その髪は金髪だろう、と申すのでございます。さよう、金髪をなびかせた彗星でございまする」

「何だか脅迫されているようではないか！」

「さようでございましょうとも。しかし、陛下、わたくしめをお信じくださいませ」とバルカ・マイは小声で言った。「もし、その彗星がメロエの国からそれましたならば、陛下の国民にとりましては、大いなる安堵となることでございましょう！」

ところが、それから二週間後、遠い国の原産になる種々さまざまな品物を集めるので有名なバアルークの市を供のものをつれて見てまわったときには、わたしはこのバルカ・マイとの会話をすっかり忘れてしまっていた。わたしは常に自然が好んで創り出すさまざまな見なれない事物や奇妙なものに好奇心を抱いていた。わたしの命により、わが王宮の庭園には一種の動物保護地区が設けられていて、そこではアフリカ産のすぐれたモデル動物が飼育されている。そこにはゴリラ、縞馬、羚羊、聖なるこしぐろとき（古代エジプト人がときの頭を持つトート神としてあがめた）、セーバ産の錦蛇、笑う尾長猿などがいた。わたしはライオンと鷲をあまりにありふれていて通俗的な象徴であるとして遠ざけていたが、国を通る旅人たちがわたしに約束した一角獣、不死鳥、竜を心待ちにしている。いっそうの保証をはかるために旅人たちに代金を先払いしたのだった。

その日、バアルークの市には、わが動物保護地区に供給したくなるような魅力のあるものは一つもな

かった。それでもわたしは一番の駱駝を買い入れた。というのは、わたしはここ数年、メロエの国から徒歩で二日以上のところへ遠ざかったことがなかったので、遠いところへ旅行したいといういわく言いがたい欲求を覚え、しかも同時にその旅行が間近いことを予感したからである。だからわたしはチベスチ山地（サハラ砂漠、チャド湖の北にある山塊）産の駱駝――黒くて、ちぢれ毛で、疲れ知らずである――と、バータ平原（チャドにある平原）産の荷役用駱駝――巨大で、重くて、毛が非常に短くて、薄茶色。不器用だから山地では役に立たないが、蚊や蠅や虻に鈍感である――そして、もちろん、華奢で、足の非常に速い、月色の駿馬と、深紅の鞍を置いて、ホガール高原（サハラ砂漠にある）やタッシリ高原（サハラ砂漠にある）から降りて来たガラマント（サハラ砂漠地方のジプシーの一族）の獰猛な民族に乗られる、ガゼル（小型のかもしか）のごとく軽いメハリ（疾走用のひとこぶ駱駝）を買った。

しかし、わたしたちをもっとも惹きつけたのは奴隷市だった。わたしは常に多種多様の民族を鑑賞していた。人間の天分は、花開くために、多種多様な身の丈、横顔、肌の色を利用しているような気がする。それは、世界的な詩が言語の多様性を獲得するのと同じである。わたしはごく小さいピグミーを一ダース、ろくに吟味もしないで手に入れたが、彼らには王室専用のフェラッカ船（小型帆船）を漕がせるつもりだ。毎年、秋になると、わたしはフェラッカ船に乗ってナイル河の第五と第八の瀑布の間をさかのぼって、白鷺を獲りに行くのである。ひょっとしたら買うかも知れない買手たちの輪の中で、むっつりと黙りこくっている奴隷の群れには目もくれずに、わたしは帰途についた。しかし、これらの黒い頭の中にひときわ目立っている、二つの金色の汚（し）み、つまり若者につきそわれた一人の若い女を見ないですごすわけにはいかなかった。その若い女も若者も、肌は乳のように白く、目は水のように緑で、世にも薄く明るい金属のような髪の塊りを肩の上で揺すっていた。

前にも言ったように、わたしは自然の気紛れに強い好奇心を持っているが、南方からやって来るもの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

にしか心の底から食指を動かさない。最近、隊商がいくつも北からやって来て、北国のいろいろな果実をわたしのところに持って来た。これらの果実は暑気や陽ざしがなくとも成熟できるもので、りんご、梨、杏と呼ばれている。たとえこれらの醜悪な果実を熱心に視察したとしても、いざそれらを味わう段になると、その水っぽくて貧弱な味に、わたしは不快感を覚えた。これらの果実が北国の不順な気候条件に幸いにも適応するのは確かに賞賛に価するが、どうしてこれらの果実が同じ食卓の上でもっとも安っぽい棗椰子と張り合うことができるであろうか？

これと似た感情を抱きながら、わたしは家臣をやって、その若い女奴隷の出身と値段をたずねさせた。家臣はすぐ戻って来た。その女奴隷は、兄弟ともども、マッシリア（北アフリカ、カルタゴ付近の地、バーバリ種族が住んでいた）の海賊につかまったフェニキアの奴隷船に人間の道具として使われていた、というのであった。値段のほうは、奴隷商人が若者と抱き合わせでなければ売らないと強く要求していることから高くなっている、という。

わたしは首をすくめて、二人分の代金を払うよう命じてしまうと、たちまち、この買物のことなど忘れてしまった。実のところ、わたしにはピグミーのほうがずっと楽しみだった。それに、わたしはナウアリクで開かれる毎年恒例の大市に行かなければならなかった。この市に行けば、もっとも辛い香辛料や、もっともねっとりしたジャムや、もっとも身体を暖めるぶどう酒ばかりか、もっとも効き目のある薬まで見つかるのである。要するに、東方諸国（オリエント）が香料、ゴム、バルサム（芳香性樹脂）、ベーレム、麝香などのごとき、もっとも官能的なもので提供できるものが見つかるのである。わたしは、わが後宮の十七人の女たちのために数枡の頭髪化粧用の粉と、わたし自身使うために箱一杯の小さな香の棒をこの市で購入させた。実際、司法や行政など公けの職務を遂行するとき、あるいは宗教上の儀式においては、芳香を放つ煙の渦が立ち昇る香炉にとりまかれているのが好ましい気がする。こういうものは威厳をあたえ、精神を刺激

する。香は王冠とともにある、風が太陽とともにあるがごとくに。

わたしがはからずもあの二人のフェニキアの奴隷に再会したのは、ナウアリクの大市からの帰途、音楽と食物に満腹したときで、二人のことをわたしに気づかせたのは、またも彼らの金髪である。われわれ一行はハシ・ケフの井戸に近づき、そこで一泊しようとしていた。焼けるように暑く、絶対的に孤独な一日のあとで、われわれは井戸の近いことを知らせるさまざまな徴候が数を増すのを認めた。その徴候とは、砂漠の中の人間や獣の足跡、火の消えた炉、斧で切られた切株などで、そしてやがて空に舞うはげたかの姿だった。死体のないところには生命はないからである。その底にハシ・ケフの井戸のある広い谷に近づいたとき、万丈の砂塵が舞い上がって、井戸が移動したことを知らせた。わたしは急いで家臣をさし向けて、王家のキャラバンの前を開けさせることもできただろう。ときにわたしは、自分の特権を行使することをたびたび諦めると言って非難されることがある。しかし、わたしとしては、みだりに謙遜してそうしているわけではない。実を言うと傲慢なのだ。あり余るほど傲慢なのである。ところが側近たちは、完璧に装われた愛想のよさの合間に、この傲慢を鷹揚な態度と見るのである。しかし、わたしは事物も獣も人間も好きで、王冠がわたしに強制する孤独には我慢できないのだ。実際、わたしの好奇心は王位が強制する抑制や隔たりとたえず衝突している。あてもなくぶらつくこと、群衆に混じること、人の顔や仕種やまなざしを見たり目にとめたりすること、甘い夢。これらは王者には禁じられているのだ。

結局、赤味を帯びて埃だらけの栄光に包まれたハシ・ケフは、壮大な光景を現出させた。獣の長い列が、斜面に押し流されて疾駆し、飼槽のまわりにひしめき合って唸り声を上げている獣の群れの中にとびこんだのだ。駱駝と驢馬、牛と羊、山羊と犬が、下肥と細かく刻んだ藁とでできた泥を踏みつけなが

ら押し合いへし合いする。これら獣のまわりでは、棒ととげのある枝を手にした、まるで黒檀から切りとったみたいな、ぎすぎすに痩せたエチオピア人の羊飼いたちが忙しく動きまわっている。彼らはときどき身をかがめ、土をにぎっては、喧嘩し始めている雄山羊や雄羊に投げつける。強烈な、生々しい匂が、暑気と水にさらに強められて、純粋アルコールのように酔わせる。

しかし、一つの神がこの混雑を支配している。水汲み人が井戸の口の真中で、横にわたした梁の上に立ち上がり、両腕で水車の羽根を動かし、綱のいちばん下をつかんで、水のいっぱい入った革袋が届くところに来るまで綱を頭の上に引き上げる。澄んだ水が短くほとばしって飼槽の中へ流れこみ、そこでたちまち泥水となる。しぼんだ革袋が井戸の中へ自由降下で落ち、綱が水汲み人の両手の間で怒り狂う蛇のように捻じれ、それから大きな巻揚機が両腕で再び動かされる。

この並はずれて辛い仕事は、しばしば貧弱な肉体によって遂行される。貧弱な肉体は拷問にかけられ、呻き声を上げ、うんうん唸り、自分の努力の速度を落としたり努力をやめたりするあらゆる機会を捜す。しかし監督は決して遠くにいるわけではない。長い鞭を手にして、常に低下する熱意を蘇えらせようとする。ところが、われわれはそれとはまったく反対の光景を見ていた。筋肉と腱でできた驚嘆すべき機械、磨き上げられた銅の像を。この像は黒い泥の汚れで斑点をつけられ、水とわけなく吹き出る汗をしたたらせている。その像には一種の躍動、抒情さえあって、働く人間と言うより踊る人のそれである。そして、大きな身ぶりで綱を頭の上に上げるとき、彼は顔を天に向かってのけぞらせ、その金色のたてがみを幸せそうにふっていた。

「あの男は何だ?」とわたしは補佐官にたずねた。

答は少々遅れて返って来たが、その答はわたしにバアルークの市と、そこでわたしが買い入れた二人

のフェニキア人の奴隷を思い出させた。

「あの男には妹がなかったか？」

そして、わたしは若い娘が粟畑で使われていることを確かめることができた。わたしは二人をいっしょにして、メロエの王宮の使用人に組み入れるよう命じた。正式の決定はのちほどすればよい……。

わたしは正式の決定をのちほどするつもりだ……しかし、こうしていったんはっきり口に出されてしまったことは、命令の即時履行を意味し、この命令の結果はいつまでも謎であり、未来の闇の中に消えているようなものだから、この場合はより重大な意味をなしていた。それはつまり、何らかの目的によって正当化されてはいないが、わたしにはのがれることのできないある衝動——少なくともわたしの意識に、わたしが屈服したことを意味していた。なぜなら、この二人の異邦人は、わたしが見落としていた運命の筋書きの中に組みこまれているのかも知れなかったからである。

それから数日間、わたしはたえず肌の白い奴隷たちのことを考えた。王宮に帰る日の前夜、わたしは眠られぬままにテントを離れ、護衛もつれずに、草原の中をかなり遠くまで歩いて行った。最初はあてもなく歩き、それでも同じ方向を保つよう努めているうちに、わたしはやがて遙か遠くに明かりがあるのに気づいた。わたしは焚火の明かりだと思い、それを何となく夜の外出の目的にえらんだ。まるでその火とわたしとの隠れんぼみたいなものだった。なぜなら、その火は土地の起伏や灌木のしげみや岩のためにたえず見え隠れしながら、それでもなかなか近づく様子がなかったからだ。この隠れんぼは——火が決定的に見えなくなったと思われたあとで——わたしが一人の老人の目の前に現われる瞬間まで続いた。その老人はローソクの火で照らされた低いテーブルの前にうずくまっていた。このはてしない孤独の真唯中で、老人は一足の革の上履に金糸で刺繍していた。見たところ、少しも彼の仕事のじゃまに

なる様子はなかったので、わたしは遠慮なく彼の真向かいに座った。暗黒の太洋の真唯中に漂うこの幽霊は、上から下まで白一色だった。老人の頭を包んでいるモスリンの覆布、蒼白の顔、大きなあごひげ、彼を包んでいる外套、長くて透き通るように白い手、そして、テーブルの上の、薄い透明なガラスのグラスの中に謎めいたように立っている百合の花まで、何もかも白かった。わたしは目を、心を、魂を、かくも静寂に満ちた光景で満たした。思考によってそこへ再び戻って来て、もし情熱がいつかわたしのところのドアをたたきに来たら、この静寂からある慰めを汲みとることができるようにと。

老人はずっと前からわたしの存在に気づいていたようだ。ついに彼は仕事の手を休めると、両手を膝の上で組んで、わたしの顔をのぞきこんだ。

「二時間すると」と彼が口を開いた。「東の地平線が薔薇色に色づいて来る。しかし純な心は救世主の来臨を願っても、朝日を待つ砦の上の哨兵ほど確信があるわけではない」

老人は再び口を閉ざした。それは悲壮な一刻だった。いまだ暗闇の中に沈んでいる全大地が暁の最初の光を予感しながら瞑想に耽る一刻だった。

「太陽だ……」と老人がつぶやいた。彼に対しては夜の真唯中でしか話しかけられないほど、彼は沈黙を押しつけている。「この半世紀、わたしは太陽の偉大でおそるべき掟に従っているが、一方の地平線から他方の地平線に至る太陽の移動は、わたしの黙認している唯一の動きだ。嫉妬深い神、太陽よ、わたしはもはやおまえしか熱愛することができない。それなのに、おまえは思考を忌み嫌っている！おまえは止まらなかった、わたしの肉体の一切の筋肉を重苦しくし、わたしの心の一切の躍動を殺し、わたしの精神の一切の光を惑わしてしまうまで。おまえの横暴な支配の下で、わたしは日に日にわたし自身の半透明の石の像に変貌する。しかし、白状するが、この石化はいとも幸せである」

老人はもう一度沈黙した。それから、とつぜん、わたしの存在を思い出したように、彼はわたしに言った。「さあ、行きなされ、あの方があそこに現われる前に、行ってしまいなされ！」

わたしは立ち上がろうとしたが、そのとき一陣の香わしい風がテレビンの木立の枝の間を吹きすぎた。それからすぐあと、信じられぬくらい間近で、羊飼いの葦笛の孤独なすすり泣きが聞こえた。その調べは、いわく言いがたい悲しみとともにわたしの心に滲みこんで来た。

「あれはだれだ？」とわたしはたずねた。

「この世の美しさを前にして泣いている悪魔（サタン）です」と老人がほろりとさせられたような声で答えた。その声は、彼のさきほどの言葉のきびしさとは対照的だった。「ああやって悪魔（サタン）はあらゆる堕落した被造物のもとから立ち去るのです。事物の純粋性が、その事物の中にある悪しきものことごとくに悔恨の血を流させるのです。明るさを持つものに用心なさるがよろしい！」

老人はテーブル越しにわたしのほうにかがみこんで、百合の花をわたしにくれた。わたしはその花を親指と人さし指とでローソクのように持って、その場を立ち去った。わたしが幕舎にたどりついたとき、地平線に置かれた金色の横木が砂丘を真赤に染めていた。悪魔（サタン）の嘆きはまだわたしの内心で鳴りひびいていた。わたしはもう二度と思い出したくなかったが、しかしすでに、金髪というものがわたしの人生に侵入して来たことを、そして、それがわたしの人生を荒廃させようとしていることを理解するのに十分なくらい、わたしはその嘆きを知っていた。

*

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com